法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-12

「前・中期旧石器捏造問題」関係考古学者のキャリアと移行期の再設計

金山，喜昭

(出版者 / Publisher)
法政大学キャリアデザイン学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
生涯学習とキャリアデザイン / 生涯学習とキャリアデザイン
(巻 / Volume)
3
(開始ページ / Start Page)
67
(終了ページ / End Page)
82
(発行年 / Year)
2006-02
(URL)
https://doi.org/10.15002/00002816

Hosei University Repository

「前・中期旧石器捏造問題」関係考古学者のキャリアと移行期の再設計

法政大学キャリアデザイン学部助教授　金山　喜昭

はじめに
1．共同研究者たちの問題の所在
2．共同研究者たちは被害者ではない
3．キャリア移行期の再設計
4．共同研究者たちのキャリアの内省と再出発
5．結語

はじめに

2000年11月5日に前・中期旧石器捏造事件が毎日新聞のスクープ記事により明らかになった。それは、早朝の宮城県上高森遺跡で東北旧石器文化研究所元副理事長の藤村新一が密かに隠し持ってきた石器を埋める一部始終を撮影したものであった。それまで20年以上にわたり藤村は日本最古といわれる旧石器の発見を次々に更新してきた。それまで約3万年前の後期旧石器が最古とされてきたが、彼が調査に関与するようになり、座散乱木遺跡約4万年前（1980年調査）、馬場壇A遺跡約20万年前（1984年）、上高森遺跡約40万年前（1993年）などのように次々と古い石器を発見し、1999年までの上高森遺跡の調査では約60～70万年前まで最古の旧石器が更新していた[1]。そうした「成果」は、座散乱木遺跡の国の史跡、教科書掲載、文化庁主催の「新発見考古速報展」などのように、政府やマスコミなどを通じて社会が認定してきた。しかし、藤村自身が、その捏造を認めたことにより、それまでの「定説」がすべて疑わしく、考古学への社会的な信頼を根底から覆すものとなった。

日本考古学協会は、捏造問題の解決を図るために2001年6月に「前・中期旧石器問題特別研究委員会」を発足させて、その検証作業を行い2003年5月に最終報告書を公表した[2]。結果は、藤村新一が関与した石器や遺跡は全て学術資料として根拠のないものであり、張本人は彼一人であったとすることで、この問題に終止符を打つものであった。しかし、こうした考古学協会の問題処理の仕方には疑問がある。遺跡の調査は一人でやるものではなく共同作業である。それは藤村と共同して調査してきた共同研究者たちの役割や責任などを、ほとんど不問にしたままとなっていた。それでは企業不祥事の後始末の構図と同じで、特定の社員一人に責任を負わせて問題処理をするようなものではないだろうか。考古学協会としては、社会的な信頼回復を目指したにもかかわらず、実は期待した通りに進んでいない。

2005年10月に法政大学と東京大学の私が担当する博物館学を受講する101名の学生たちにアンケート調査したところ、当時中学1・2年生であった大学生は約半数が不信感をもち、さらに高校生や大学生になると、大多数の者が不信感をいだいたことが分かる。そして現在でも、彼らの約60パーセントが不信感をもったままである。その理由は、「ショックから立ち直れない」、「考古学の限界性を感じた」、「報道が少なくなった」などである。日本考古学協会による検証作業については、当時中学生だった大学1・2年生たちはほとんど知らないが、大学院生や社会人では約半数が知っ

Hosei University Repository

ている。だが、ほとんどの者が捏造であったこと以外に、検証結果の具体的な内容を理解しておらず、それが不信感を払拭できない理由となっている。

なお、日本考古学協会の検証結果に先立つ、2001年7月に法政大学学芸員資格課程では、私が企画をして、シンポジウム「前期旧石器問題とその背景」を実施した[3]。シンポジウムの主な成果は、前・中期旧石器や遺跡についての学術的な報告や検討が不十分であったことや、政府は岩宿遺跡の教科書掲載までの期間に比べてあまりにも尚早に掲載を進めたこと、「新発見考古速報展」（文化庁主催）が強力な普及推進装置になったことなどのように、「官」の権威が主導して社会に浸透した構図を明らかにするとともに、その処方箋は市民が情報に対するリテラシー能力をみにつけることの必要性などを提示した[4]。しかし、考古学協会による検証作業では、こうした視点からの問題追求がなされることはなかった。

私は、シンポジウムの報告書の末尾に、「前期旧石器問題は、遺跡や石器の検証が終了したことで解決するものではない。今後も様々な解決の方法があるだろうが、（中略）なかでも、考古学の信頼回復のために、関係者がそれぞれ自己清算することである。いつまでも口を閉ざし続けるならば、考古学は永遠に信頼回復の目途が立たない。関係者たちの一刻も早い立ち直りを期待したい」[5]という一文を掲載して、関係者たちによる自己清算を促した。しかしながら、共同研究者たちは、その後も自己検証などの問題解決をはかることなく沈黙したままとなっている。

本稿の趣旨は、捏造事件は藤村一人だけの責任ではなく、むしろ彼の周囲で共同調査していた考古学者たちの問題の所在を明らかにしたうえで、それらの人たちのキャリア移行期の再設計の必要性を提示し、その実行によって彼らの信頼回復と、さらに考古学界の信頼回復につながることについて考察する。

1．共同研究者たちの問題の所在

(1) 共同研究者とは

まず、共同研究者の定義は次の通りである。捏造事件が報道された2日後の2000年11月7日付の朝日新聞紙上で國學院大學教授の小林達雄は、この問題は藤村一人だけではなく、その周囲にいた共同研究者の責任性について言及した[6]。それは「藤村君の行為は決して許されることではないが、彼一人に責任を負わせて終わりにするのは納得できない…（共同研究者について）彼らの研究はいつも、それまでの資料より一段古いことを証明してきた。そんなにすごい発見が年に何度もあるなどと、冷静に考えればあるはずなどないのだが、疑うよりも神格化が進んだ。慎重さが足りなかった。常に新しい発見を望む。藤村君を後ろから押すような空気が生まれていた。ところが、その空気が見えない。みんなで同じ空気を吸っていたからだ。…調査は非常にナイーブな藤村君頼みだった。彼を馬にして、みんながむちをふるっていたのではないか」（アンダーラインは筆者による）という。共同研究者とは小林の指摘するように、「藤村氏と時間の共有の度合や志を確かめ合いながら行動即ち発掘をして来た者」で第一次関係者というべき研究者をさす[7]。

『前・中期旧石器問題の検証』の報告書の中で、坂井隆は、この共同研究者について、捏造関係刊行物に常に複数の同一人物が登場することに着目して、組織内での役割分担の構図を描き出している[8]。組織内では、藤村は「石器の発見者」という役割を担っていたが、共同研究者の主要な人たちは次の通りである。

岡村道雄：「70年代より藤村と行動を共にし、90年代以降も自らの著書で上高森などを取り上げ、文化庁役人として捏造遺跡の教科書掲載を助長した。共に調査し、その『成果』を大々的に強調した座散乱木・馬場壇Aについては、多少とも疑念を抱きながらもそれを明らかにすることなく」「特に捏造増幅の決定的な役割を果した『座散乱木Ⅲ』報告書のまとめ部分の執筆をし、また

Hosei University Repository

その後も一般向け概説書で上高森に至るまでの捏造成果を積極的に紹介してきた。捏造成果を広範囲に普及させる役割を結果的に担った」[9]としている。

鎌田俊昭：「（東北旧石器文化研究所の）総括・渉外などを担当」し、「70年代より藤村新一と行動を共にし、特に（東北旧石器）研究所設立の94年以降は、岡村の指摘のように発掘調査『成果』の発表を中心的に行ってきた。捏造に関わる調査のほとんど全てに関わった」[10]としている。

梶原　洋：「70年代より藤村と行動を共にしていたが、（東北旧石器文化）研究所設立の94年以降は（研究を担って実働部隊としての学生を率いる）役割を担った。さらにそれ以上に、（考古学）協会での研究発表も含めて99年の国際シンポジウムを頂点とする発掘調査『成果』の学術的意味付けを、中心的に立って行ってきた」[11]としている。

以上の3人は、70年代当初の調査から、藤村と密接な関係をもち、捏造発覚の時点まで役割を異にしながらも前・中期旧石器の関連活動をしていた。岡村は1987年に東北歴史資料館から文化庁に転出して以降は調査に従事しなかったが、文化行政の担当者の立場から前期旧石器を社会に普及する推進役となった。鎌田と梶原は藤村と終始活動を共にして、結果的に捏造遺跡の調査に関与した。

やはり、『前・中期旧石器問題の検証』の報告書の中では、国立歴史民俗博物館教授の春成秀爾は、共同研究者の責任性について、次のように指摘をしている。「藤村の力だけで『前・中期旧石器』を捏造できたわけではけっしてない。藤村が『発見』し、1人で発表していたら、誰も信じなかっただろう。専門の研究者集団が組織的に発掘調査を実施し、彼の『発見』を学問的に評価・正当化し、研究論文を発表し学界にアピールしたからこそ、多くの人が認めたのである」[12]。

春成の指摘は、岩宿遺跡から旧石器を発見した相沢忠洋が、1949年7月に当時南関東地方の撚糸文土器の編年研究をしていた江坂輝弥の自宅を訪れて、偶然居合わせた芹沢長介（当時明治大学院生）の関心をよび、同大学の杉原荘介助教授らによる調査によって、日本列島に旧石器（先土器）文化のあることが証明された過程を思い起こさせる。相沢は群馬県のアマチュア考古学愛好家であり、これまで学会で否定され続けてきた旧石器文化の存在を、一人だけでは評価・正当化することはできなかったが、杉原ら大学研究者の主導的な支援を得ることで考古学界で認知をはかることができた。

岡村と梶原はその後、東北大学考古学研究室の教授になった芹沢長介の門下生である。岡村は、1972年に前期旧石器を専攻する大学院生として長野県飯田市石子原遺跡の旧石器調査に参加して石器の調査や報告書の作成を担当している。その後、1976年に前期旧石器に関する論文として、「北関東前期旧石器時代における二石器群」[13]、「日本前期旧石器の始原と終末」[14]、「約二万五千年前とそれを遡る時期のアジア旧石器文化と日本の関係」[15]の前期旧石器論文の3部作を発表して、国内での前期旧石器発見の期待と編年の仮説などを打ち出している。

鎌田は、明治大学の杉原荘介の門下生であり、それまでに神奈川県月見野遺跡群など旧石器遺跡のフィールド調査の経験をもち、卒業後は宮城県の実家に戻った。前期旧石器との出会いは、恩師の杉原が1967年に提起した「杉原仮説」を取りあげることができる。「杉原仮説」とは、日本列島には3万年以前の前期旧石器文化は存在せず、それまでは無人の地であったという説である。しかしそれは逆説的意味をもっていた。杉原は1953年に調査した青森県北津軽郡金木町の藤枝溜池の礫層の中から発見された「石器」を約20万年前の前期旧石器であると認定した。しかし翌年、それは自然営力によって生じた自然石であり石器ではないと訂正した。そこで、杉原は自ら「杉原仮説」を提起したのである。杉原の本意は、仮説を破るために慎重な調査や研究によって前期旧石器の存在を証明してほしいことを望んでいた。鎌田は、そうした恩師の無念さに報いるために前期旧石器調査に突入していくことになったのかもしれな

Hosei University Repository

い。

(2) 旧石器捏造の全貌

藤村が関与した前・中期旧石器時代の捏造は少なくとも1976年から2000年までの25年間、9都道府県の少なくとも32遺跡におよぶ[16]。それは藤村と共同研究者らにより、最初は前期旧石器の存在を明らかにする段階から、最古の石器群を追求する段階に推移しながら、宮城県内から全国各地の遺跡におよぶ段階へと拡大化した。その期間は、坂井隆の段階区分[17]などから次のように区分される。

1期：石器文化談話会が中心になり活動する（1975～84年）

2期：東北歴史資料館が中心になり活動する（1985～93年）

3期：東北旧石器文化研究所が中心になり活動する（1994～2001年）

1期：鎌田俊昭・藤村新一・柳田俊雄や岡村道雄と東北大学の考古学専攻学生などが加わり、民間研究グループ石器文化談話会を結成する。この時期は14点の刊行物があり、大半は報告書である。代表的な刊行物は、『座散乱木遺跡Ⅲ』である。この遺跡のまとめ役として岡村道雄の名が記載される。また、全体の半数に芹沢長介の名が記載される。鎌田俊昭の名前も見える[18]。

この時期、岡村は東北大学文学部考古学研究室助手から1980年に（宮城県立）東北歴史資料館の研究員として着任した（1986年まで）。岡村らがまとめた『座散乱木遺跡Ⅲ』の報告書の中で、岡村は「前・中期旧石器存否論争」に終止符をうち、日本列島に前期旧石器が存在することを宣言した。しかし、それらは日本考古学協会の検証調査により藤村が後期旧石器時代の地層より古い約4万年前の地層に後世の石器を埋め込んだものであったことが判明した。この遺跡は石器文化談話会が実施する初の前期旧石器遺跡の本格的調査であったが、皮肉にもそれは同時に前・中期旧石器問題の出発点ともなった。その後も県内では山田上ノ台、北前、志引遺跡などが調査され最古の年代を更新するが、いずれも藤村の捏造によるものであった。

2期：東北歴史資料館が主体になり馬場壇A遺跡などを調査する。この時期は25点の刊行物があり、それらは報告書・遺跡発表要旨などである。芹沢の名前は発表要旨を除くほとんどに記載される。岡村の名前も多く登場し、鎌田俊昭・梶原洋の名前も登場する[19]。1986年の『馬場壇A遺跡』までは岡村が中心的役割をはたしていたが、岡村が文化庁記念物課に転出して以降、後任として着任した山田晃弘が馬場壇遺跡の調査・報告を担当した。

この時期も藤村により更に最古とされる石器が捏造される。馬場壇A遺跡などでは10万年代を遡る石器が捏造され、さらに高森遺跡では50万年前まで遡るとされた。また、藤村は宮城県外にも出向き、東京・福島・山形でも前期旧石器を捏造した。また1992年に藤村は、それまでの業績が評価されて第1回「相澤忠洋賞」を受賞した。

3期：1992年末に鎌田・藤村・梶原らにより東北旧石器文化研究所が創設される。この時期は53点の刊行物があり大多数が発表要旨である。指導者は芹沢の名前が半数以上にみられ、藤村と共に、梶原・鎌田・横山裕平の名前で発表することが多くなる[20]。

この時期も、さらに最古とされる石器が捏造される。上高森遺跡では60万年前とされる石器や、石器埋納遺構を捏造する。また宮城県中島山遺跡と山形県袖原遺跡では石器同士を接合させて30キロも離れた遺跡間に人の往来のあったことを捏造した。北海道総進不動坂遺跡では世界最北の前期旧石器を捏造している。また、東北旧石器文化研究所（鎌田・藤村・横山裕平）が第4回「相澤忠洋賞」を受賞した。

岡村が調査に関与することはなくなるが、文化庁の役人の立場から1995年に開始した「新発見考古速報展」（文化庁主催）において、その目玉として95年に上高森遺跡、97年に瓢箪穴遺跡、99年に総進不動坂遺跡、中島山遺跡、袖原3遺跡、2000年には埼玉県の長尾根、小鹿坂遺跡の前・中

Hosei University Repository

期旧石器とされる石器が出展される。95年に発見された上高森遺跡の石器埋納遺構などの前期旧石器が教科書にも掲載されるようになり、97年には座散乱木遺跡が国史跡に指定された。しかし、捏造が判明して以降、教科書からはその部分が削除され、国の史跡も解除された。

(3) 旧石器遺跡の検証結果と共同研究者への疑問

これらの共同研究者は、いずれも捏造事件について、藤村の捏造を見抜けなかったことに責任を感じている。例えば、鎌田と梶原らは、藤村について「(巧妙な) 手口に加えて『ねつ造』という言葉すらも思いつかず、藤村を信じきっていた我々の盲点をつき、それに乗じて大胆且つ冷静に、瞬時に埋め込んだと考えられる…ねつ造は、本質的に計画的でなければ実現不可能である」[21] と述べている。

しかし、彼らの言動が藤村の捏造を誘導するようなことはなかったのだろうか。この問題は決して藤村一人の単独行動で割り切れるものではなく、その背後には、小林達雄の指摘するような「(藤村を) 後ろから押すような空気」があり、それが捏造行為を誘導したのではないかという疑問である。

このことに関連して、鎌田と梶原は、藤村が前期旧石器の捏造を始めた動機として、先述した岡村の論文が影響を与えた可能性を指摘している。「(藤村は) その時々の問題点を専門家の論文や勉強会、そして雑談からも敏感に汲み取り、それに呼応するかのように次々と新資料を「発見」するのである。…1976年に岡村道雄氏の「前期旧石器」に関する3部作が発表されると、時を同じくして座散乱木遺跡や安沢遺跡で当該期に属するとされた石器群が発見された」[22] と指摘している。

角張淳一は、この点について、岡村の3部作[23] は、座散乱木遺跡調査以前に岡村による前期旧石器の仮説を提示したものであり、それは地質学的年代に保証のない石器群を理論的に整理したものであるという。その上で、捏造問題は、石器文化研究会などでの勉強会を通じて、仮説を実証するような石器群を発見することへの期待と、それに留まらずに実行したことに問題の本質があると指摘している[24]。角張は、次のように結論する[25]。

> ひとつは、当時の石器研究者達がことごとく騙された理由は、岡村の指導による理論・踏査・発掘・整理研究の考古学的整合性にある。そして、この点こそが疑いを退け、捏造の発覚を妨げた最も大きな原因である。次に、考古学的整合性のある捏造という点からは、犯人の藤村新一が「岡村理論」に相当精通し、現実の石器で当事者の岡村道雄を騙すことのできる考古学的実力の持ち主という必然性が必要である。
>
> しかし、実際の藤村新一は、石器の実測図を書くことも、石器の説明もできない、全くの素人であることは周知の事実である。彼が岡村理論に整合する石器を、埋める前に予め選択することなど、できるであろうか。ここには、考古学的に整合性のある捏造をできるはずのないアマチュアが捏造を実行していた、という思いもよらない事実が、捏造の発覚を妨げた二つ目の原因としてある。
>
> よって、この捏造事件の本質は、極めて有能な石器研究者である岡村道雄と、アマチュアで普通の会社員の藤村新一との間に横たわる、通常の常識では考えられない何かに支えられて、1976年には既に起こっていた捏造事件であると考えられる。

そのような状況証拠だけで、岡村がそのような役割を担ったとはいえないだろうが、岡村の言動が、藤村に石器を捏造させる原因になっていたことはあり得るだろう。鎌田らの指摘もその辺りを示唆している。前宮崎公立大学教授の奥野正男も、「私の考古学・遺跡観から見れば、岡村の仮説がなければ、藤村の捏造は生じえなかった」[26] と述べている。人間は権威ある者から褒められれば嬉しくなるし忠実にもなる。期待をかけられればそれに応えようとする。藤村が岡村の言動や期待

Hosei University Repository

に応えるために捏造をしたことを否定することはできない。これに関連して岡村は、当時のことを次のように回想している[27]。

> 1980年4月、座散乱木の切り通しの前に、藤村新一氏や私たちは横一線に並び、地層断面を一生懸命に削った。私の移植ゴテにも石器が当たった。『カチッ』という手ごたえがあった。まちがいなく卒業論文以来、長年夢にまで見た「旧人」の石器だ。日本にも4万年前をさかのぼる中期旧石器時代に、確実に人類が生活していたのだ。その瞬間、あまりの感激に、体の中を電気が走り、あたりが暗くなるような眩暈を私は覚えた。

といい、岡村はそれを「第二の岩宿の発見」と呼び、考古学上で画期的で偉大な成果であると自画自賛している。

また、岡村は、かつて共同研究者であった鎌田、梶原らや藤村も含めて設立した東北旧石器文化研究所による遺跡調査について、民俗学者の赤坂憲雄との対談において次のような否定的な見解を示している[28]。

> （東北旧石器文化研究所に対して）上高森で見つかった石器を私（岡村）はなかなか見せてもらえなかったですよ。自分たちの成果をすぐ論文で発表されることへの警戒心が彼らにあったと思います。成果ですから公表して注目を集めたいと思う一方、報告をきちっとまとめるのも手間がかかり、それを利用されてしまうという心配もある。彼らにとっては矛盾した気持ちが錯綜していたのではないでしょうか。
>
> 公表して客観性を担保することは必要なことですが、もうひとつ大切なのは、ただ発掘発見して成果を出すだけでなく、現場をいろいろな観点から謙虚に吟味することを自ら放棄したのではないでしょか。そういった作業を省略してしまうと、現場の綱渡りだけになって研究に繋がりません。研究が本当の意味で積み上げられてきたのかということに、私は疑問を持っています。
>
> というのも、なぜ行政や多くの考古学者や自然科学者と共同して研究するのをやめたんですか、と彼らは問われています。行政や研究者と一緒にやると、目的や方法を設定して、発掘、出土品の整理や分析を経て報告書を作るまでの一連の作業を踏まえなければならず、そういうサイクルがまだるっこい、自分たちはもっと急いで旧石器の古さを遡っていかねばならないし、そういう使命感を持っている、と彼らは言っているんです。私はそれが研究所を作った本音であり、彼らの危険性だと思っています。

このことから、岡村は、かつて共同研究者の一員であった鎌田や梶原らの調査に危機感を抱いていたことを認めている。

しかし、岡村は捏造発覚の直前に出版された『縄文の生活誌』（2000年10月24日発行）[29]という一般書の中で、藤村をはじめとする東北旧石器文化研究所の活動を高く評価しているのである。

藤村の業績について「上高森遺跡での発見は、世界中を探しても類例のないビッグニュースだった」[30]というように、1995年に発見された60万年前のものとされる石器埋納遺構の発見を賞賛している。また、宮城県内から福島・山形県、関東地方や北海道にいたるまで藤村が前・中期旧石器を発見したことについて「彼が遺跡を探し求めて歩き回る範囲がそのまま、前期・中期旧石器文化が確認される範囲と同じであるのも、彼の業績のすごさを証明している」[31]と絶賛している。

先述したように、岡村が藤村をはじめ東北旧石器文化研究所の考古学調査の手法などに疑問をもつならば、考古学者であり、かつ文化庁文化財保護部記念物課主任調査官という公職につきながら、社会に与える悪影響に鑑みて慎重な対応を怠ったのはなぜだろうか。東北旧石器文化研究所が発掘してから出土品の整理や分析を経て報告書を作ることを放棄して、発掘のみを優先させて旧石器の古さを遡っていく手法は、考古学の学問的な手続きを逸脱した行為である。岡村はどうして重大な欠陥を無視して絶賛したのだろうか。岡村の

Hosei University Repository

言動は矛盾している。

さらに、岡村は同書で藤村に、さらに石器の新発見を促すような発言をしている[32]。

> 上高森遺跡では、2000年2月に、さらに3メートルほど深いところからの古い地層からも、石器が発見された。その石器は、100万年前に近い古さをもつ可能性がある。100万年といえば、北緯40度をやや越えた中国大陸内陸部の泥河湾地区でも100万年から150万年以上の古い遺跡がいくつか発見されている。大陸と日本列島は、氷河期には陸続きになって同一歩調で人類の生活が展開されていたと考えられるから、今後は、日本列島においても、同程度の古さまで人類の生活痕がさかのぼって確認されるであろう。
>
> 上高森遺跡以外には、福島県安達町の一斗内松葉山遺跡や二本松市の原セ笠張遺跡、山形県尾花沢市の袖原6遺跡でも、100万年前くらいの古さまでさかのぼりそうな地層から石器が発見された。最初の「原人」は、中国大陸から朝鮮半島を経由して日本列島に移住したと見られているので、今後西日本でも「原人」の遺跡が発見される可能性が高い。（アンダーラインは筆者による）

ここにみるように岡村は、100万年前の前期旧石器や、西日本でも「原人」段階の旧石器が発見されることを予想しているが、藤村のこれまでの「業績」を絶賛することが前提として述べられていることから、文脈的に藤村にそれらの発見を促しているとも受け取れる。捏造発覚時の記者会見において、藤村が「プレッシャーを感じていた」という発言の背後には、こうした岡村の発言なども作用していたのではないだろうか。岡村の発言は、公的な色彩を帯びたコメントともなり、世間を鼓舞させる影響力をもっていた。それが、「（藤村を）後ろから押す空気」となっていたのかもしれない。

さらに、岡村と共に鎌田や梶原らとの座散乱木遺跡や馬場壇A遺跡、その後に鎌田や梶原らによる高森遺跡の調査について、発掘に参加した佐藤信行は、当時の発掘調査の疑問を次のように証言している[33]。

① 石器が出土した際、出土状況の観察、状況写真等が済まないうちに、石器が調査関係者達の手を渡り歩く風景があった。

② 石器を取り上げた跡の土中にその圧痕が残らない、又は見えない場合があった。

③ 石器は比較的土中から容易にはずせる場合があった。

それら疑問をもちながらも、「当時の（調査の）主力メンバーは、岡村、鎌田、梶原氏を中心とする旧石器の専門家集団であり…私のようなテーマを異にする民間研究者にとって疑問であっても、旧石器時代の発掘では容認されているのだろうと思わざるをえない」と回顧している。

②と③については、日本考古学協会などの検証作業などで、鎌田や梶原は認めている[34]。しかし、①については不問にしているが、実は重大な欠陥調査ではないだろうか。当初から発掘調査の基本的手続きを踏んでいなかったことになる。先述の岡村による東北旧石器文化研究所の危険性についての指摘は、自らの調査を除外していたが、佐藤の証言によればそうとは言い切れないことになる。

鎌田や梶原については、岡村の指摘するように、報告書を刊行することなく、発掘だけを優先させてきたことは確かに問題であり、当事者たちに問題がある。報告書を刊行するということは、事前に整理や石器観察や記述化を意味する。しかし、座散乱木遺跡などのように、岡村が中心に進めて報告書を作成した遺跡さえも捏造であったわけであるから、彼らの手法による研究法（発掘・石器観察・記述など）は多くの欠陥があったことになる。

そして、ついには鎌田ら自身が認めるように、「（捏造発覚の2・3年前は）それ以前の石器に比べて明らかに見劣りし、発見石器が縄文の石鏃だったり、ヘラ状石器であっても、「また縄文時代のもののようだ」と現場で歓声をあげていたにも関わらず、我々自身愚かにも何の疑問も持たなか

Hosei University Repository

ったのである。また、秩父市の建物跡やピット群に触発されたとはいえ、2000年の上高森遺跡の調査では、遺構群を誤認して掘り上げるまでになってしまったのである。我々は、最近では神懸り的に『藤村がいるから出るか出ないかの心配はしたことがない。何がでるかという期待だけだ』とまで豪語するようになった」[35] という。正常な感覚が麻痺した状態になっていたことが分かる。

2．共同研究者たちは被害者ではない

捏造報道を受けて実施した2000年11月5日の宮城県庁での記者会見では、東北旧石器文化研究所の鎌田、梶原、藤村が登場した。この時点で、捏造の張本人は藤村だけで、鎌田と梶原は何も知らなかった被害者であるという構図が出来上がった。当初藤村が認めた捏造遺跡は、上高森遺跡と北海道総進不動坂遺跡の2遺跡だけだった。

鎌田は「確認が甘かった。藤村氏の実績からやるはずはないと。悪夢のようだ」といい、梶原洋も「欺かれた」「今思えば石器の置き方が従来と違うなど気になる点もあった。しかし藤村さんに全幅の信頼を置いていたので、疑うなんてことはしなかった」[36] という反応であった。

岡村がこの問題について公式に発言したのは、2001年1月21日のシンポジウム「前期旧石器問題を考える」（日本教育会館にて）においてである。発表要旨には、「発掘調査は、調査者たちの善意に支えられ、一定の方向に向かって進行するものであるから、その過程で作為が働いたり、死角を狙ったり、予想もできない魔術師的な技術が駆使されることなど誰も予想しない」[37] というように、やはり被害者の意識であることが分かる。また、先述の赤坂憲雄との対談においては「職業柄（文化庁調査官）私は考古学の成果を広く一般に知ってもらうことを促進できる立場にいます。それによって社会的理解を広げて、埋蔵文化財行政に理解と協力を貰おうという思いもあります。それで学問から逸脱しないぎりぎりの範囲まで解釈・復元を進め、わかりやすく発掘成果を解説し、評価していこうという気持ちで本（『縄文の生活誌』）を書いたところ、足下が掬われてしまった気がします」[38] と述べていた。

しかし、その後に旧石器遺跡の検証発掘が行われた結果、捏造遺跡は2遺跡だけでなく、これまで藤村が関与した遺跡がすべて捏造だとされるようになると、彼らの発言内容にやや変化が現れる。

座散乱木遺跡の検証発掘により捏造が判明した2002年5月、岡村は毎日新聞の取材に対して、「私には2つの責任がある。研究者時代にねつ造を見抜けなかった責任と、行政官時代にウソの旧石器時代観を広め、教科書にまで載せてしまった責任だ」[39] と述べている。

また、鎌田と梶原は、やはり同じ時期に國學院大學で共同記者会見を実施しているが、その席上で「当初、我々はここ2・3年間の藤村氏の精神が不安定であり、我々を含めた多大なプレッシャーが彼を追いつめ、あのような蛮行をさせてしまったと考え、その責任を痛感していた。しかし、藤村氏の告白により、少なくとも20年前の座散乱木遺跡にまで遡る可能性が強くなった。我々が果たさなければならないことは『20年以上だまされました。ごめんなさい』ではなく、なぜ20年以上も多くの人々がだまされてきたのかを解明することだ」[40] と述べている。

なお、記者会見の冒頭で日本考古学協会の特別委員会の戸沢充則委員長が趣旨説明をしているが、彼らは藤村の旧石器捏造について、過去の発掘などで最も身近に接していたことや、藤村の行動、行為、関係者のかかわりについて再検証して、これまでに分かったことを報告するとしながら、考古学協会などによる検証調査に非常に積極的な協力者であったことを評価している。これについて毎日新聞社の記者は「藤村氏の共同研究者として、この1年半の間批判の矢面に立たされた3人の立場（内一人は栗島義明）に配慮し、名誉回復の機会を与えたとも取れる発言だった」としている[41]。

このように共同研究者は被害者であったという構図から、責任を感じるように変化したことが分かるが、それは藤村の身近にいた者として「なぜ

Hosei University Repository

藤村の捏造を見抜けなかったか」という点での責任の所在である。しかし、「なぜ捏造を見抜けなかったか」とは、被害者意識から生じたもので、依然として被害者の立場から脱却できずにいるのではないだろうか。

先述してきたように、藤村は、実際に捏造の実行者であるが、共同研究者たちが不在では捏造はなされなかっただろう。彼らのこれまでの言動が、捏造に影響を与えていた公算が高いことからすれば、それは被害者ではなく当事者の一員にほかならない。大事なことは、被害者意識を捨てて、実は加害者であったという認識である。当事者としての意識をもつことが、前・中期旧石器問題の解決には不可欠である。この点を確認することができれば、当事者の視点からこれまでの調査を再検証することができるし、被害者としてでは見えない問題の本質が、実は見方を変えることによって見えてくるからである。そして共同研究者たちがキャリアを再設計するうえでも、そうした自覚が出発点としての意味をもつ。

3．キャリア移行期の再設計

キャリアの語源は、そもそもラテン語のcarrusすなわち車輪の付いた乗り物を起源とし、やがてフランス語のcarriereとなったころからレースコースという意味になり、競う合いの意味がつきまとうようになったといわれる[42]。そこから現実の日本社会では、キャリアを高度な専門職の総称や、職業に関連する昇進や上昇的な職業移動などについて用いられることが多い。しかし、キャリアデザイン学[43]でいうところのキャリアとは、渡辺美枝子らによる次の定義がある[44]。

> キャリアは、個々人が、具体的な職業や職場などの選択をとおして、時間をかけて一歩一歩努力して進んでいくものであり、創造していくものである。個人が何を選び、何を選ばないかによって作り出されるものであるから、ダイナミックであり、生涯にわたって展開されるものなのである。したがってキャリアは個々人にとってユニーク（独自）なものである。

よってキャリアとは渡辺が指摘するようにライフスタイルの概念と重なることから、その人なりの「生き方」だともいえる。金井壽宏は、キャリアの概念を考える視点を次の6つに整理している。それによればキャリアとは、「①時間幅が長い、②モチベーションとは異なる視点がいる、③節目だけはしっかりデザインするべきだ、④自分らしさ、自己のイメージ、自己概念にかかわっている、⑤特別なひとの問題ではなく、だれもの問題だ、⑥それを節目でデザインすることが、個人にとっての戦略になる」[45]ということになる。つまりキャリアとは、誰にでも平等に存在するテーマだという前提のもとに、人の生涯にわたり、目先の成功や褒美を求めることではなく、人生の「節目」に発生する「独特の状況」を理解してデザイン（設計）したり再設計して、よりよい生き方をすることが、その人なりの人生にとって大事だということになる。キャリアについては、最終的にその人のキャリアの良し悪しについて評価するのは、外部の人間ではなく、本人が主観的に評価することが強調されている。最終的に本人が納得できることが良いキャリアということである。

キャリアを考える上で大事な点は、「節目」に着目することが不可欠である。これはトランジションといわれ、「移行期」や「転機」とも訳される。金井はトランジションを「節目」としているが、ここでは「移行期」とすることにする。

トランジションについては.W.ブリッジス[46]、D.レビンソン[47]、E.エリクソン・J.エリクソン[48]、E.シャイン[49]などで、それぞれトランジションのサイクル・モデルを提唱しているが、ここではブリッジスのモデルを採用することにする。

人は誰でも長い人生の中でいくつもの「移行期」に遭遇する。ブリッジスのいうところのトランジションであるが、それらは入学、就職、結婚などの肯定的な側面や、退学、離婚、解雇、死別などの否定的な側面もある。

例えば、ブリッジスはグループ・セラピストとしての次のような経験を紹介している。結婚２年

Hosei University Repository

後、ある夫婦に待望の第1子が誕生したにもかかわらず、妻は子育てを予想外に苦労していた。そこで、グループ・セラピーのメンバーに夫に手伝ってもらうことや、赤ちゃんの取り扱い方にアドバイスを求めていた。しかし、妻にとっては、そのこと以上に、それまでの夫との気楽な新婚生活がなくなり、日常生活がこれまでのように予定通りにいかなくなったことが問題であった。「私は赤ちゃんがほんとに大好き。だけどかつての自由や気楽さはなくなってしまった。好きな時に休むこともできないし、自分のスケジュール通りに生活することさえできない…もう過去には戻れない。懐かしい時代は過ぎたんです」[50]。赤ちゃんの誕生は、彼女にとってキャリアの移行期であった。新婚生活から、赤ちゃんの誕生により親子3人の新生活に入ったが、過去の新婚生活を終わりにすることができず、中立ゾーンの渦中にとどまり混沌とした状態のままで、親子3人の新しい生活の始まりを意識化できない状態にいたのである。

ブリッジスのトランジション論の特徴[51]は、このような移行期のプロセスを次のように分析していることである。それは、人々が経験する問題は、「何かが終わる時期」「混乱や苦悩の時期」「新しい始まりの時期」の各時期を経過するとしている。それらを第1段階：「終わり」のプロセス、第2段階：ニュートラル・ゾーン、第3段階：何かが「始まる」、と想定する。その中でも「終わり」のプロセスは、離脱（disengagement）、アイデンティティの喪失（disidentification）、覚醒（disenchantment）、方向感覚の喪失（disorientation）の要素からなる。

「終わり」は、何かがうまくいかなくなった時から始まる。終わりの各要素が生じていく順番は決まっておらず、自然な順序や正常な順序などはない。大切なのは、移行期のさなかにいる人に「終わり」を体験させることであるという。

次に、ニュートラル・ゾーンに入ると、空虚感を体験するようになるが、そこからの対処法として大事なことは、じたばたせずに降伏することであるという。この状態を耐えなければならないが、少しでも短期に切り上げるための方法としては次のことが有効だという。「一人になれる特定の場所と時間を確保する」「ニュートラル・ゾーン体験の記録をつける」「自叙伝を書くためにひと休みする」「これまでどう生きてきたかを理解できれば、これからどう生きるかが見えてくる」「この機会に本当にしたいことを見出す」「もし、今死んだら心残りは何かを考える」などである。ここで特に重要なことは、過去を振り返ることである。これまでの自分の生き方や体験などを整理することで、過去の反省点を確認して、これからの自分の処し方を有益にしていくことである。

「始まり」は、「終わり」と空白のニュートラル・ゾーンが終結した時から開始する。「始まり」は、長年培ってきたそれまでのキャリアの体制を破壊することであるから、内的抵抗を伴い、前進へのステップが内的警戒心を始動させることがある。ここでは、各プロセスをふまえた、つまり本当に「終わり」を経験して、ニュートラル・ゾーンに突入して、そこで本人が望む「始まり」を見出したのか、それとも「終わり」を避けて、ニュートラル・ゾーンを放棄するために、自分で見切り発車して「始まり」を開始しようとしているのかは大きな違いである。前者が正常な移行期であり、後者はキャリアにとってマイナスの移行期である。

このようなブリッジスのトランジション論は、先述した共同研究者たちのキャリアを再設計する上でも参考にすることができる。共同研究者たちは、捏造問題を契機にして、まさにキャリアの移行期に遭遇したのである。岡村は、2001年に文化庁記念物課から独立行政法人奈良国立文化財研究所に異動した。鎌田は考古学を捨てて家業を営んでいるという。また梶原は東北福祉大学教授としてそのまま在職しているが、かつての栄光はなくなったという。それぞれ外見上のキャリアの変化を生じたり、現状を維持しているようだが、問題は内面的なキャリアの移行期を正常に通過していないことである。

Hosei University Repository

4．共同研究者たちのキャリアの内省と再出発

ブリッジスによる、移行期のプロセスは、模式的には「終わり」のプロセスを経て、ニュートラル・ゾーンに突入して「始まり」の段階を迎える。しかし、現実には、人は移行期の局面では、このような模式的なプロセスをとらないことがある。ニュートラル・ゾーンが「終わり」より先行すると、人は家庭でも職場でも「死に体」になった時にみられるように、精神的にはプラグが抜かれた状態となり、それまでの自分がそこにいなくなる。外的状態（仕事や人間関係）はそのままでも、情緒的にはすでに「終わり」となっている。そのような状態は、現在の状況を終結させるために、本人が心の中で決めた時に生じることがあるという[52]。

共同研究者が遭遇した移行期は、きちんとした「終わり」を経ずに、ニュートラル・ゾーンの渦中で停滞している状態である。共同研究者たちは、前期旧石器の発見という夢を実現したと確信してきたが、それは捏造であることが判明したことで、現実は幻であることに気がついた。鎌田・梶原は、当初その事実を受け入れたくないという衝動にかられたのではなかったかろうか。記者会見では、藤村一人がやったことで、自らは被害者の立場になることで、現実を直視しようとせず逃避しようとした。捏造遺跡は藤村が認めた2遺跡だけで、他の遺跡は捏造でないことを強調した。岡村も、自らが中心的役割をはたした座散乱木遺跡や馬場壇A遺跡では捏造がありえないことを強調した。

しかし、その後の検証調査によって、捏造の全貌が明らかになった。捏造が発覚してから約1年後、梶原は毎日新聞社の記者の質問に対して、この一年間を振り返り、意気消沈した様子で語っている。「関係者に頭を下げっぱなしだ。この１年間の後始末で疲れちゃった」と苦労を話すだけであったという。また、鎌田は、「いやあ、今日は（謝罪のために）尾花沢に行ってきたよ。もう毎日（新聞社）さんのせいで、この１年間、ジェットコースターのようだったよ。上がったり下がったり。俺はね、最初は、大丈夫、（ねつ造は）あの２遺跡（上高森遺跡と総進不動坂遺跡）だけだって、心で言い聞かせてきたよ。袖原３遺跡で、再調査が始まって、最初に石器が出たって聞いた時は正直『毎日（新聞社）、ざまあみろ』って盛り上がったよ。でもね、次の日かなあ、これ（掘る跡を示す仕草）が出たって。今度はざーっと落ち込んだよ。もうこんな思いはしたくないねえ」[53]と心境を語っている。この発言から、彼らの空虚感が伝わってくる。彼らは混迷の渦中にいるといえる。その状況は現在まで継続しているのかもしれない。

あるいは、「終わり」を避けて、ある結果を新しい「始まり」と勝手に呼んでいることも考えられる。その結果とは、先述のように岡村は、座散乱木遺跡の捏造が判明した直後に、研究者時代に捏造を見抜けなかった責任と、行政官時代にウソの旧石器時代観を広め、教科書にまで載せてしまった責任を痛感していることである。また座散乱木遺跡の国史跡を解除したことなどにより、自らの責任を果したと自認して、この問題を「終わり」にしようとしたのかもしれない。また、鎌田と梶原による共同記者会見は、被害者の立場から再検証した結果を報告することで、この問題に終止符をうつとともに、戸沢の計らいにより名誉回復をはたそうとしたものであったといえる。

しかし、彼らはまだニュートラル・ゾーンの渦中にいて、新しい「始まり」に入ることができない状態にいる。大事なことはニュートラル・ゾーンにいる人に、「終わり」をきちんと体験させることである。彼らは、「終わり」のプロセスの全てを正常に通過していない。そこで彼等の状況を、離脱、アイデンティティの喪失、覚醒、方向感覚の喪失の各段階ごとにみていく。

離脱の段階は、「（離脱にかかわる）出来事はわれわれの役割を強化し、われわれの行動をパターン化するのに役立った古い手がかりのシステムを壊してしまう。それは、古いシステムが壊れたので新しいやり方を考えねばならないという性質のものではない。むしろ、あるシステムが機能して

Hosei University Repository

いる限り、メンバーの誰もが、別の生き方や別のアイデンティティをイメージすることが非常に困難になってしまう。しかし離別によってはじめて、容赦なく変化のプロセスが始まる」[54]。

捏造という事実によって、それまで藤村が関与してきた前期旧石器から離別することになった。それは、座散乱木遺跡の捏造が明らかになった2002年5月に決定的となった。捏造発覚後、共同研究者たちは、それまでの人間的・社会的な関係を失うことになった。東北旧石器文化研究所を支援してきた市民や学生、行政関係者などの多くの人たちとの離別した。さらに岡村の場合には『縄文の生活誌』の出版直後であったことから、出版関係者や読者との離別も生じただろう。

アイデンティティの喪失の段階は、鎌田や梶原においては、捏造発覚直後から開始した、宮城県築館町（上高森遺跡）、山形県尾花沢市（袖原3遺跡）などへの関係自治体に出向いた謝罪行為によって、惨めさを痛感したに違いない。当時鎌田は、築館町助役に対して「個人がやったとはいえ、組織としての責任がある」と涙を浮かべて謝った[55]という。考古学界でも、研究者としての信頼が失墜した。日本考古学協会や東北日本の旧石器文化を語る会などの学会では1984年以来、毎年のように新発見遺跡の報告をしてきた[56]が、すべてが捏造であることが判明し研究者としての自信を喪失したのではないか。鎌田は日本考古学協会の委員を辞任し、「相澤忠洋賞」を返上している。

梶原は、アカデミックな側面から、前期旧石器の普及役を担っていたが、その最大のイベントが1999年10月に東北福祉大学で開催した「芹沢長介先生傘寿記念国際シンポジウム」であった。国内外から著名な研究者を招聘実施した一大イベントであり、梶原は東北福祉大学の「看板教授」として華々しい活躍をしたばかりであった。ハーバード大学、ビクトリア大学、ネブラスカ大学、ケンブリッジ大学、香港中文大学、ソウル大学、漢陽大学、サハリン教育大学、ロシア科学アカデミーなどの研究者たちの前で、梶原は、それまでの自らによる前期旧石器とされる調査成果を踏まえて、「日本列島への原人の到達時期とルート」「最古のシンボルか、上高森の埋納遺跡の意味」「原人の進化と極東の状況」などについて問題提起した[57]。しかし、その後の捏造発覚により、梶原の学者としてのアイデンティティは完全に喪失することになった。捏造記者会見で、梶原は「裏切られた気持ちだ。これまでの研究を土足で踏みにじられた」と怒りをぶちまけた[58]という。

岡村については、先述の赤坂との対談において、捏造発覚後は「長いこと平常心を持てないくらいショックでした」[59]という。それが内面的なアイデンティティの喪失を意味するのかどうか不明であるが、文化庁から奈良国立文化財に異動してからも外見的なアイデンティティは維持され続けている。

覚醒の段階は、「古い現実は頭の中にあって、外部にはないのだということを理解することから始まる。単にポジションを切り替えるなどというレベルではなく、人間が本当に変わるためには、それを正しく認識することが必要だ」[60]。

これまでの前・中期旧石器は全て魔法によって幻出された「現実」であった。しかし現実は当初から彼らが関与した遺跡は虚構であったのだ。幻想と現実のギャップを埋めることは、つらさがともなう。だから、なかなか信じられない、信じたくない内的抵抗があるだろう。そこで大事なことは、共同研究者たちは、被害者ではなく、当事者の一員であるという認識をもつことである。被害者のままでは、そのギャップを埋めることはできず、よって覚醒することができない。当事者としての立場にたつことによって、新しい認識が生まれ、進歩することができる。

ブリッジスによれば、「覚醒する人は前進するが、幻滅する人はそこに留まって、同じことをただ役者を変えただけで繰り返す…彼らは同じ円の上を回るだけなので、真の前進や本当の発達は生じないのである」[61]。

方向感覚の喪失の段階について、共同研究者たちは捏造発覚当初は2遺跡だけで、他の遺跡は捏造ではないと確信していた。しかし、検証作業が

Hosei University Repository

進み全てが捏造であることが判明したことで、岡村の動向は不明だが、鎌田や梶原は失望した。それは座礁した船のような状態をいう。彼らは、「石器文化研究会、東北旧石器文化研究所の魅力は、…誰でも参加できる公開の精神であった。ところが、この公開の精神が、そのために対応する体制に不備があったことで、藤村によって逆手に取られ、大きくゆがめられ、多くの遺跡で自由自在にねつ造をする結果として許してしまったことになる」[62]というが、なぜ市民参加型の調査方式が捏造に結びつくのか意味不明であり、行き先が見えない前途を悲観した様子を読み取ることがでる。

以上のことから、これまで共同研究者たちが「終わり」を正常に終了していないのは、覚醒の段階が未熟なためであることが判明した。それを改善するためには、被害者意識を捨てて、当事者の認識をもつことである。それによって「終わり」を経ると、次のニュートラル・ゾーンに入ることになる。

ニュートラル・ゾーンは混迷とした空虚感をリアリティをもって実感することに意味をもつが、そこで大事なことは自らの過去を振り返ることである。共同研究者にとって必要なことは、当事者として、これまでの発掘調査、整理作業や、学会活動や社会への普及活動を自己検証することである。考古学協会の検証は所詮外部からの検証であり、問題の本質は蚊帳の外に置かれたままであった。ブラック・ボックスの中のことは外部からは分からないからである。

当事者しか知らない多くの問題点があるはずである。調査研究史を当事者の立場から自らの言動を全て再検討することで、自らの言動に対する「なぜ」という疑問の糸を一本ずつ手繰り寄せていくことである。それによって、新たな問題の所在を明らかにすることができる。

先述したように、岡村が1980年４月、座散乱木の切り通しで藤村らと地層断面を削った際に発見した「旧人」の石器といわれるものが不明となっているのはなぜか。なぜ発掘で石器を取り上げる以前に出土状態の観察や写真撮影を怠り、直ぐに取り上げたのか。座散乱木遺跡13層石器に見られる「ガジリ痕」[63]について、座散乱木遺跡の報告書ではなぜ人為的な剥離痕として記載したのか。石器に付着する赤色の不自然な付着物にも疑問[64]がありながら、なぜ放置したのか。C.キーリによれば、梶原は1994年に「上高森遺跡の石器は縄文石器と区別がつかない」と認識していたという[65]が、それがなぜ放置されたままであったのか。鎌田らは「古さ」ばかり「新発見」ばかりを強調する調査をなぜ強行したのか。岡村は東北旧石器文化研究所の調査に危険性を感じていながら、なぜ教科書掲載を促進させ、「新発見考古発掘速報展」で毎年連続的に前・中期旧石器を目玉商品的な扱いをして急速に社会に普及させようとしたのか。そのほかにも外部の者には不明な謎の糸がたくさんあるはずである。

こうして、ニュートラル・ゾーンを終結させれば、新たな「始まり」が船出する。真の「始まり」は、内的再結合にもとづくといわれる[66]ように、共同研究者たちは、そもそも考古学を志した頃の原点に立ち戻り、それ以降の功罪を反省し、職業や家族とのライフバランスなどの全ての局面を洗い直して、これから自分の進む道を何となく予感することになるだろう。移行期を正常に経過した結果として、本来の自分に帰還して、スパイラル状に上昇した人生に向かうことになる。

その時に、再び前期旧石器研究を目指そうとしてもよいであろう。しかし、正常に「終わり」を終了せずに、勝手に終結させて、それを再開しても、結局は「元の木阿弥」として、同じ過ちを繰り返す危険性が高い。キャリアは下降することになる。ある考古学者たちは、彼らには今後旧石器研究を続ける資格がないと叱咤しているが、これまでのやり方を踏襲するならば同感である。捏造発覚以前から、前期旧石器といわれる石器は縄文時代の石器であることを指摘していた共立女子大学の竹岡俊樹によれば、共同研究者には石器を観察する能力がなかったことが致命的な欠陥であったとし、石器が分からないことを認めて再出発す

Hosei University Repository

るべきだという[67]。人は、苦労よりも安易さを選択しがちだが、キャリアの移行期を成功させるには、安易さでは通用しないのである。

5．結語

日本考古学協会は、捏造事件の問題解決を図るために特別委員会を発足させて、検証作業により2003年5月に最終報告書を公表した。その結果は、藤村新一が関与した石器や遺跡は全て学術資料として根拠のないものであり、その張本人は藤村であると断定した。捏造の責任を彼だけに負わせるものであった。考古学協会は、失墜した考古学界の信頼を回復させることに努めたが、今日に至るまで信頼の回復には至っていない。さらに考古学協会は倫理綱要の制定作業をすすめているが、はたして期待どおり信頼を回復することができるのだろうか。

私の疑問は、藤村と遺跡踏査や発掘をともにした共同研究者たちが、騙された被害者の立場のままで、学会もそれをほとんど不問にしていることである。それでは事件の本質は何も見えず、彼らのキャリアにも悪影響を与えることになる。現時点は、共同研究者のキャリアにとって重要な時期である。このまま放置すれば、考古学者としての信用を喪失したまま生涯をおくることになり、あとから取り返すことはできない。

考古学協会による検証や、共同研究者たちの言動などの検討から、この問題は藤村一人による責任だけによるものでなく、共同研究者たちの言動が捏造を誘導させて拡大化させていった可能性のあることが判明した。つまり、これまで共同研究者たちは被害者の立場でいたが、そうではなくこの問題を引き起こした当事者の一員だといえる。そうした認識を前提にして、共同研究者たちのキャリアの移行期を再設計することが必要である。

ブリッジスのトランジション論によれば、キャリアの移行期は、それまでの生き方を「終わり」にして、混沌とした「ニュートラル・ゾーン」に突入して空虚感などを経験してから、新しい「始まり」を迎えることができる。現状の共同研究者たちは、被害者意識の中でニュートラル・ゾーンの渦中にいるままか、あるいは見切り発車して「始まり」を開始して、なかなか順調に物事が進まない状況にいるようである。いずれにしても共通した問題点は、「終わり」のプロセスを正常に終了していないことである。この局面で大事なことは、被害者でなく当事者であることを認識することである。それができれば「終わり」を無事終了することができる。次のニュートラル・ゾーンにおいては、特に過去を振り返り自らと対面することが大切である。そこでは約25年におよぶ捏造問題を、当事者の立場から検証し、その結果を外部に公開することである。

こうしてニュートラル・ゾーンを早く抜け出せれば、それだけ新しい「始まり」に早く出会うことができる。再度、前期旧石器研究に取り組むことでもよいだろう。この時は、過去の反省の上に立っているので、人間的にも能力的にも一回り大きくなる。移行期を正常に通過することができれば、本来の自分に帰還して、スパイラル状にキャリアが上昇していくようになる。逆に、移行期を正常に通過できなければ、キャリアは下降することになる。

前・中期旧石器捏造問題は、共同研究者たち自らが、キャリアの移行期を内省して説明責任を果たすことにより、個人の信頼回復をはかることができる。さらには考古学界の信頼回復につながるだろう。今後、日本考古学協会や関連学会は、「人間は過ちをするものである」という原点に立ち返り、研究者が研究上のトラブルに遭遇した際には、キャリアの再設計を支援することも視野に入れることが求められるだろう。

注

（1）後期旧石器は約3万年前から1万年までの新人の段階、中期旧石器は約15万年前から約3万年前の旧人の段階、前期旧石器は約15万年前から約150万年前の原人の段階とされる。なお座散乱木遺跡が調査された当時は、後期旧石器以前の中期旧石器時代に相当する年代の石器でも「前期旧石器」と総称したことがあ

Hosei University Repository

る。

（2）前・中期旧石器問題調査研究特別委員会2003．5『前・中期旧石器問題の検証』日本考古学協会、625p

（3）段木一行監修2002『前期旧石器問題とその背景』ミュゼ

（4）シンポジウムは、パネリスト：小田静夫（東京都教育庁文化課主任・学芸員）、小野昭（東京都立大学教授）、小林達雄（國學院大學教授）、段木一行（法政大学教授）、笹川孝一（法政大学教授）、司会進行：金山喜昭による。

（5）金山喜昭2002．3「あとがき」『前期旧石器問題とその背景』ミュゼ、p200～203

（6）朝日新聞2000年11月7日「〈神様がいる〉疑問置き去り―小林達雄・國學院大學教授に聞く」)

（7）小林達雄2003．5「捏造事件と考古学研究者」『前・中期旧石器問題の検証』日本考古学協会、p604

（8）坂井隆「役割の分担状況」『前・中期旧石器問題の検証』日本考古学協会、p546～567

（9）（8）p546

（10）（8）p546

（11）（8）p546

（12）春成秀爾2003．5「前・中期旧石器問題の解析」『前・中期旧石器問題の検証』日本考古学協会、p593

（13）岡村道雄1976「北関東前期旧石器時代における二石器群」野州史学第3号

（14）岡村道雄1976「日本前期旧石器の始原と終末」考古学研究第23巻第3号

（15）岡村道雄1976「約二万五千年前とそれを遡る時期のアジア旧石器文化と日本の関係」文化第40巻1・2号

（16）織笠昭2003．5「捏造の拡大」『前・中期旧石器問題の検証』日本考古学協会、p529

（17）坂井隆2003．5「遺跡調査の組織・体制」『前・中期旧石器問題の検証』p538-547

（18）（17）p538

（19）（17）p538

（20）（17）p538

（21）鎌田俊昭・梶原　洋2002.5「藤村新一による旧石器ねつ造事件と我々の責任」『日本考古学協会前・中期旧石器問題調査研究特別委員会報告（Ⅱ）』日本考古学協会、p183

（22）（21）と同じ

（23）（13）～（15）の文献をさす。

（24）角張淳一2002．6「捏造事件の本質」『日本旧石器学の再出発36人の提言』（竹岡俊樹編）SCIENCE of HUMANITY BENSEI Vol.40、勉誠社、p152～162

（25）（24）p160～161

（26）奥野正男2004．6『神々の汚れた手』梓書院、p188

（27）岡村道雄2005．10『縄文の生活誌』講談社、p22

（28）岡村道雄・山田晃弘・赤坂憲雄2001．4「事件が問いかけるもの―前・中期旧石器考古学の現在」東北学4、東北芸術工科大学、p9-10

（29）岡村道雄2005．10『縄文の生活誌』講談社

（30）（29）p14

（31）（29）p24

（32）（29）p17

（33）佐藤信行2002．5「「ねつ造」問題発覚以前に私が抱いていた疑問」宮城考古学第4号、p170-173

（34）（21）p173～185

（35）（21）p184

（36）朝日新聞2000．11．6朝刊

（37）岡村道雄2001．1「日本列島の前期・中期旧石器研究の展望」『シンポジウム：前期旧石器問題を考える発表要旨』国立歴史民俗博物館春成秀爾研究室、p53

（38）（28）p11

（39）毎日新聞旧石器遺跡取材班2002．9『旧石器発掘捏造のすべて』毎日新聞社、p108

（40）（39）p112～113

（41）（39）p110～112

（42）川喜多喬2005．1「キャリアという言葉の歴史から考える」文部科学教育通信No.116

（43）2003年4月に法政大学はキャリアデザイン学部を設置した。それに先立ち、大学ではシンポジウムを開催してキャリアデザイン学の構築に向けて内外の有識者と意見交換を実施した。その概要は次の通りである。「生涯学習とキャリアデザイン」桐村晋次（神奈川大学教授）、尾木直樹（教育評論家）など、「キャリアデザインと大学の役割」寺脇研（文化庁文化部長）

Hosei University Repository

など、「キャリアデザインと生活文化」熊倉功夫（国立民族学博物館教授）、松岡正剛（編集工学研究所長）など。また、2004年9月には日本キャリアデザイン学会（会長：清成忠男）が設立されて研究者と実務家約600名の会員を擁してキャリアデザイン学の構築に取り組んでいる。シンポジウムは、（筧川孝一編2004．9『生涯学習社会とキャリアデザイン』法政大学出版局）として刊行した。

(44) 渡辺美枝子・E.L.ハー2001．9『キャリアカウンセリング入門』ナカニシヤ出版、p19

(45) 金井壽宏2003．7『キャリア・デザイン・ガイド』白桃書房、p44～49

(46) Bridges,William（1980） Transitions: Making Sense of Life's Changes. Reading, MA:Addition-Wesley.（倉光修・小林哲郎訳『トランジション』創元社,1994．11）

なお、本書の2版（改訂版）でブリッジスは、トランジションとともに、チェンジ（Change）の概念を補足している。当初のトランジション論では見落としていたと述べている。両者は明確に区別できないが、トランジションはチェンジを受け入れるために通過しなければならない人生の再設計や自己の再認識という内面的（心理学的）なものである。チェンジは、むしろ引越しや転職などのように外面的な変化をさす。

Bridges, William（2004） Transitions: Making Sense of Life's Changes. Second Edition. De Capo Press.

そのほかにブリッジスのトランジション論は次の文献などがある。

・Bridges, William（1991） Making Transitions: Making the Most of Change. Second Edition. De Capo Press.

・Bridges, William（2001） The Way of Transition: embracing life's most difficult moments. De Capo Press.

(47) Levinson, Daniel, J.（1978） The Seasons of a Man's Life. New York, NY: Ballantine Books.（南博訳『ライフサイクルの心理学（上）（下）』講談社学術文庫,1992．5）

(48) E.エリクソン・J.エリクソン（Erikson, E. H. and Erikson, J.M.（1997） The Life Cycle Completed: A Review: Expanded Edition. New York; NY: W. W Norton&Company.（村瀬孝雄・近藤邦夫訳『ライフサイクル、その完結』みすず書房、2001．3）

(49) Schein,Edgar H.（1978） Career Dynamics: Matching Individual and Organizational Needs. Addison-Wealey.（二村敏子・三村勝代訳『キャリア・ダイナミックス』白桃書房、1991．2）

(50) W.ブリッジス1994．11『トランジション』創元社, p19～20

(51) (50) p111～199

(52) (50) p171

(53) (39) p38-39

(54) (50) p127

(55) 日本経済新聞2000．11．6朝刊

(56) (17) p544～545

(57) (http://www.j-tsushin.co.jp/bun/kakuti/data/9912_10.htm)

(58) 日本経済新聞2000．11．6朝刊

(59) (28) p4

(60) (50) p133-134

(61) (50) p135

(62) (21) p184～185

(63) 小野昭・佐藤宏之2003．5「捏造石器の検証・宮城県岩出山町座散乱木」『前・中期旧石器問題の検証』p47～76

(64) (21) p182

(65) チャールズ・T・キーリ2000．11．17「今度は考古学のスキャンダル：予備的リポート」（http://www.amy.hi-ho.ne.jp/mizuy/zenki/This-Time-j.html)

(66) (50) p181

(67) 竹岡俊樹2003．5「旧石器捏造「神の手」だけが悪いのか」文藝春秋2003年5月号、p350～358